

## 運動の楽しさを味わい、いきいきと自己表現できる授業をめざして

体育 第6学年  
白山市立松任小学校・教諭

### 1 事例の概要

近年、「子どもの体力低下」が危惧されているが、本校の児童においても、その実態が器械運動において顕著に出ていた。単元の前に行った意識調査では、体育自体の「好き嫌い」以上に、マット運動にマイナスイメージを持つ子が多かった。6年生までの学習の中で、マット運動での逆さ感覚や技能の習得が十分になされず、意欲が乏しい現状であった。それでも、「できるようにになりたい」という願いは持っていた。

そんな現状を打破するために、「できそう」「できた」「何かつかんだぞ」という自分の変容が自覚でき、運動の楽しさ・学ぶ意味を感じ、意欲の高まりにつながるようにしたいと考えた。そこで、①安全を意識し、運動の楽しさを追求するための工夫、②自信を積み重ねられる場の工夫、③関わりを活かした授業作りを3つの柱として掲げ、単元を進めることにした。

#### A-1 事前のアンケート結果

### 2 実践内容

#### (1) 単元の目標

- ・自分の課題をもち、友達と協力して行うとともに、器械・器具の安全に気をつけて運動できる。(関心・意欲・態度)
- ・技の系統・技能のポイントを知り、友達と見合っただけで考えながら練習に取り組むことができる。(思考・判断)
- ・自分の能力に適した技に取り組み、完成度を高めることができる。(運動の技能)
- ・自分の取り組んできた技を組み合わせた連続技ができる。(運動の技能)

#### (2) 指導上の工夫点

##### ① 安全を意識し、運動の楽しさを追求するための工夫

###### ア 安全面に関して

安全のルールは、時間を重ねるごとに児童も教師も、あいまいになりがちである。そこで、a技の開始前に「いきます」という声をかけ、見る側も「はい」と返す声による安全確認。b系統と技の難易度を理解したうえで技に取り組むこと。(技の段階をふまないで挑戦しない) これらの2つの約束を徹底した。

###### イ 運動の楽しさを追求させる工夫

準備運動は補助運動を兼ね、体づくりの運動にあるものを取り入れると同時に、テンポのよい音楽を織り交ぜて行った。また、授業の最後に、ミニ発表会の場を設け、個のめあてが達成できたかどうかを相互評価し、アドバイスや励ましを送り合うようにした。

##### ② 自信を積み重ねられる場の工夫

学習カードは、技の完成度を3段階に分け、個人の課題が「側方倒立回転の足を高く上げること」など、どの技のどこを意識しているかが見る側にも具体的に分かるようにした。また、技の系統がわかるように、易しい技から難しい技へと矢印を加えた。練習には、ゴムやダンボール、ナイロンカーテンなど、怖さを感じず、実施する本人が技の完成度を実感できるような補助器具を用意した。

③ 関わりを活かした授業作り

課題に合わせて、互いに見合う姿を求めるグルーピングを活用した。a 互いの変容を知り、運動を楽しむこと、b 効率よく技の完成に向けたアドバイスを言い合うこと、それぞれの目的に合わせて2種類のグループを活用した。

B-1 補助運動

B-2 補助器具

B-3 学習カード

3 指導の実際

	学習活動 (8 時間)	関心・意欲・態度	思考・判断	技能
一 (1)	オリエンテーション	①マット運動に関心を持ち、 <u>安全に気をつけて</u> 、協力してマット運動をしようとする。 (行動)		
二 (5)	知り、高める・挑戦する <b>(ねらい①)</b> できる技を知り、完成度を高めていこう ・ カードにある技でできる技を試してみる ・ ポイントを意識し、より大		②自分のできる技を知り、カードや系統図を見て、 <u>自分の課題を見つけている</u> 。(行動・カード)	③ めあて1 できる技を練習し、完

C-1 学習指導案(単元計画・評価規準)

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 声は安全だけでなく、周囲の視線や気を引き付ける効果もあり、声を掛け合って、自発的に協力することの基礎にもなった。
- ・ 音楽に乗って楽しく行う補助運動や見せ合う発表会は、1時間の授業の中で、ほぐしや緊張感といった心のアクセントになって、マット運動への意欲が高まった。
- ・ 技の系統性も、児童は冷静に受け止め、簡単な技から順に課題を設定していた。
- ・ 技能の伸びでは、倒立(前転)や側方倒立回転の「体を支持し、逆さ感覚をつかむ技」で顕著な伸びを表した。
- ・ 自然に声を掛け合う姿が多くなった。関わりを意図的に持たせることで、自分ではわからない技の成否やつまづきを仲間から知ることができた。

(2) 課題

- ・ カードの中にポイントを明示し、完成度を数値に置き換えると、技の完成が不十分であっても、児童は伸びる(完成に近づく)プロセスを具体的に感じる事ができた。しかし、わかりづらい表現のものや、書くのに時間がかかる等は、改善していく必要がある。
- ・ 教師は技に目が行きがちだが声の掛け方や技の視点を見つけた子(関わり方の良さ)に着目することも大切である。

D-1 技能レベル 単元前後の状況